



機材を求めて

イギリスの照明機材レンタル会社はロンドン内に多数ありますが、舞台系、映像系、イベント系の仕事によって、頼るレンタル会社も変わってきます。舞台系では、断トツで WhiteLight、Stage Electrics、Sparks が占めていますが、イベントやコーポレート、コンサートでは、PRGやHawthorn、Event Concept、Neg Earth Lighting、Fisher、Richard Martinがよく使われていて、映像ですと Panalux、Pixi PixelやCirro Liteをよく見かけます。

照明プランが照明家から提出されて、すぐに機材狩りに走るのには、プロダクションマネージャー/テクニカルマネージャーです。彼らは機材業界のコンタクトを幅広くもっていて、いつも彼らとやりとりをしているので、どここの会社に何の機材が新しく入荷されたとか、この会社だったら機材はちゃんとメンテナンスされているとか、どの機材を何台もっているという知識に富んでいます。ちょうど今のプロジェクトでETC Lustrを12台3週間分、レンタルしようと、機材会社に当たってもらっていますが、どこも出てしまっていてだめだったそうです(WhiteLightがもっている900灯もすべてOUTだそうです!)

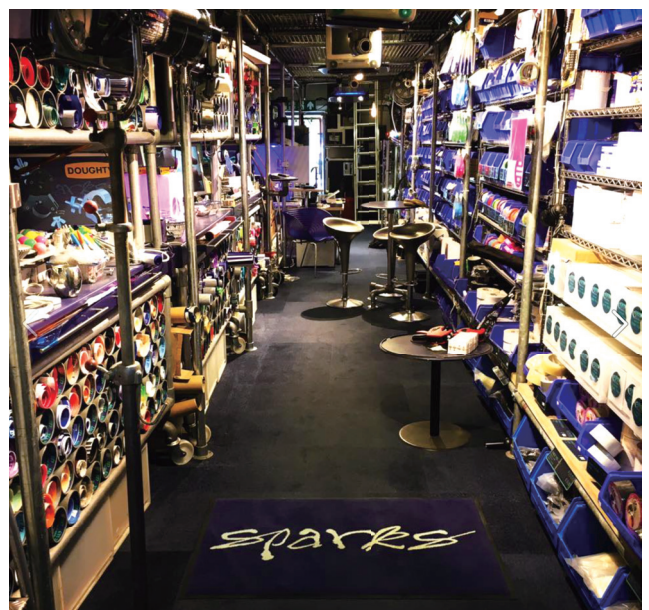
1つの会社から借りるほうがもちろん楽なのですが、限られた在庫や、予算次第では、いくつかの機材会社を当たらざるをえないこともあります。日本では照明チーフが機材を発注するのが普通なのでしょうか？質の良い機材を、いかに安く手に入れられるかは、プロダクション/テクニカルマネージャーの腕と知識にかかっています。追加発注や変更の融通が利くか利かないかも、彼らがどれだけ顔が広いかが、機材会社と仲が良いかによって変わってくるものです。照明家はそこまで機材会社と距離を縮める必要はないのですが、選ぶ機材によっては、どこから借りるべきか迫られることが稀にあるので、知っていて損はないでしょう。

数か月前に、自分がデザイン兼チーフで入ったお仕事「和のあかり展」(協会誌エッセイ1月号)での出来事です。搬入/仕込みの日の朝に、機材が一向に届かない事件がありました。仕込みのために朝早く来てくれたテクニシャンたちを背中に、冷や汗を感じました。確かに機材発注オーダーは通して、その支払いイベント主催の経理にお任せしました。機材会社に問い合わせると、「お支払いがまだ済んでおりませんので、出荷に間に合いませんでした」と。「な、なに?!」。一瞬、目の前が真っ暗になりました。いくら主催者側の予算と意向がギリギリに決まったとはいえ、お支払いはしっかりしてください。でないと会場が開きません!と叫びたい気持ちを抑えて、例の経理さんに電話しました。「一体、何があったのですか?機材が届いてないのですけど。即対応をお願いします!」と。返ってきた返事が「本当に申し訳ないのですが、一昨日からのすべての支払いがストップされてしまっていて…(以下省略)」。普通だったら、このイベントは幕を開ける権利なしなのですが、毎年お世話になっている会社なので、ピンチを救うべく、自分が立て替えることに。とはいえ、発注をかけたはずの機材会社はロンドン外(プリストル)拠点なので、今から届けてもらっても、仕込みが間に合わない!さあ、どうする。そこの機材会社をお願いしたそもその理由は、ほしい機材がすべて揃っていたから。しょうがない、ピンチのときはSparksをお願いするしかない。ちょうど現場がSparksから近かったのもありますが、すべての機材が揃っていなくとも、あるものを組み合わせて何かしら

貸してくれる、ピンチヒッター的存在の頼れるSparks様なのです。

余談ですが、SparksはWhiteLightなどに比べると、規模は小さいですが、どの機材会社をも差し置いて、みんながいいのです。Sparksを設立したポール・アンダーソン氏は、芸術監督サイモン・マクバーニー氏率いるテアトル・ド・コンプリシテの専属照明家でもあり、日本でも何度もお仕事をなさったそうです。素晴らしい感性と親しみやすい性格の持ち主です。だからといって、毎回すべてを破格にしてくれるというわけでもありません。ただ、本当に予算がないときは、それを理解して格安にしてくれたりと、親身に相談に乗ってくれるのです。今回の件でも、とても融通を利かせてくれて、本当に助かりました。そんな愛のある機材会社はなかなかありません。なので、私は予算のあるお仕事が回ってきたときは、なるべくSparksさんからたくさんお借りして、恩返しをするように心がけています。何事も、持ちつ持たれつ。

今月と来月は、テートモダンでのライブアート、サウスバンクセンターでの演劇、布袋寅泰氏のライブストリーミング撮影、ゲートシアターでのオペラと、機材狩りの日々が続きます。



いつ訪れても笑顔で迎えてくれるSparks